

「因縁」は説明できるか

——森鷗外「寒山拾得」論

高野 奈保

一

森鷗外「寒山拾得」（『新小説』大五・一）は「高瀬舟」（『中央公論』）と同月に発表された小説である。

同時代評では、「閻丘胤（略）の気持は作者その人の気持ではないかと思つたりしてゐます。」（正宗白鳥「文芸時評」『中央公論』大五・二）と作者である鷗外の思想を推測する読みも存在したが、基本的には「子供時分から耳馴れてゐる寒山拾得と云ふ名に、あゝ云ふ面白い話がついてゐる事を今度始めて承知しました。」（阿部次郎「新春文壇の印象」『新潮』大五・二）、あるいは「寒山拾得」は有りふれた材料から組立てられてあつて、私にしても略々知つてゐることだから珍らしくはなかつたが、（略）鷗外氏の新作によつて見ると、この人物（何の感じをも抱かずに見過ごしてゐ）た閻——論者注）の方に一層の共鳴を覚えさせられます。」（正宗白鳥、前掲）というように、寒山拾得伝説という題材の範疇で評価されていた。

また先行研究では、「寒山拾得」発表時期が鷗外が医務局長を辞する直前だったこと、「上院占席」（貴族院議員任命）の可能性に鷗外が期待を寄せた書簡を、石黒男爵に書いた翌日の大正四年十二月七日に「寒山拾得」を書き上げたことに注目し、その状況と絡めて、積極的に鷗外の思想が読みこまれてきた。

例えば磯貝秀夫は、寒山を鷗外の「長い陸軍生活からの隠退」後の「生

活へのゆめ」の仮託として、閻丘胤を「それまでの官吏森林太郎自身」として捉え、「寒山拾得」を「鷗外の思念の一極限を、あざやかに示した作品」だと述べた（『寒山拾得』【鑑賞】『鑑賞 日本現代文学 第1巻 森鷗外』角川書店、昭五六・八）。また山崎國紀も、当時の鷗外の精神状態を「己の精神の調整をはかる必要」があつたと指摘して、「寒山拾得」の意義を「精神的葛藤を『寒山詩集』にも求め」「白隠の禪」から「無」と「己の「解放」を学んだことに求めている（『評伝 森鷗外』大修館書店、平一九・七）。

また、早くから斎藤茂吉が指摘したように、「盲目の尊敬」といふことを一つの出題（『鷗外の歴史小説』『文学』昭一一・六）として、「盲目の尊敬」を払う閻丘胤を俗、寒山・拾得を聖に分類し、「寒山、拾得に笑殺という形で「折伏」される閻丘胤という役人の姿を浮き彫り」（山崎一類『「寒山拾得」論』『森鷗外研究』平三・二）にした意味や効果への考察が重ねられてきた。

しかし、これらの考察は、いずれも「三通りある」「道とか宗教とか云ふものに対する態度」について書かれた箇所と、閻が国清寺に向かつて以降の展開に注目するものであり、それ以前の箇所、特に小説において分量を多く割かれている豊干と閻の出会いに関する分析は十分に尽くされていない。また、こうした読み方では、「附寒山拾得縁起」

（森林太郎「高瀬舟と寒山拾得——近業解題」『心の花』大五・一、後に

「寒山拾得」の部分のみ「附寒山拾得縁起」と改題、以下「縁起」と略す
が縁起としての機能を十全に發揮しなくなる。

そこで本論では、小説全体を読み直すために「三通り」の「態度」や「道」、「折伏」の分析からひとまず離れ、小説本編の「因縁」という言葉に注目して分析を進める。小説本編に書かれていることと書かれていないことを区別しながら、「寒山拾得」を、「因縁」をどのように処理しているかを考える小説として、読み直してゆきたい。

二

まず、本編の分析の手がかりを求めて、「縁起」を確認してみよう。「縁起」は、以下の文から始まる。

徒然草に最初の仏はどうして出来たかと問はれて困つたと云ふやうな話があつた。子供に物を問はれて困ることは度々である。中にも宗教上の事には、答に窮することが多い。しかしそれを拒んで答へずにしまふのは、殆どそれは謔だと云ふと同じやうになる。近頃帰一協会などでは、それを子供のために悪いと云つて氣遣つてゐる。この徒然草の話は、第二四三段にある。全文を掲げる。

八になりし年、父に問ひて言はく、「仏は如何なるものにか候ふらん」といふ。父が言はく、「仏には人のなりたるなり」と。又問ふ、「人は何として仏には成り候ふやらん」と。父又、「仏の教へによりてなるなり」と答ふ。又問ふ、「教へ候ひける仏をば、なにが教へ候ひける」と。又答ふ、「それも又、さきの仏の教へによりて成り給ふなり」と。又問ふ、「その教へ始め候ひける第一の仏は、如何なる仏にか候ひける」といふ時、父、「空よりやふりけん、土よりやわきけん」といひて、笑ふ。／＼問ひつめられて、え答へずなり侍りつ」と、諸人に語りて興じき。

(校注・訳者 神田秀夫・永積安明・奈良岡康作『新編日本古典文学全集27 方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄』小学館、昭四六・八)

ここでは、仏がどういふものかと質問する八歳の子供と父との問答の一連が書かれている。父の答えに子供がさらに遡つて質問していった結果、父が空や土から出てきたのだろうか、一切衆生悉有仏性を連想させる答えで区切りをつけたものの、実際は答えられなくなってしまったことがわかる。

「縁起」では、この話を引いた上で、「問はれて困る」質問に対して「拒んで答へずにしまふ」ことを「殆どそれは謔だと云ふと同じやうになる。」と帰一協会を引き合いに出しながら否定し、続けて子供からの「寒山詩」のおねだりを皮切りに質問を重ねられ、「私」が必死で答えるエピソードが紹介される。

子供の寒山拾得についての質問に、「私」は「已むことを得」ず「寒山拾得の話」で答える。その話を「殆其儘書いた」本編は、つまり「私」の返答の全文である。したがって「縁起」冒頭は、宗教を「謔」とは思っていない「私」が、子供の「宗教上の」質問に答えようとする意志表明であり、「縁起」と「本編」の枠組を説明していると言える。

しかし子供は「寒山拾得の話」では満足しない。回答は不合格で、「私」は質問から解放されるところか質問攻めに遭つてしまう。

子供には、話した跡でいろいろの事を問はれて、私は又已むことを得ずに、いろいろな事を答へたが、それを悉く書くことは出来ない。最も窮したのは、寒山が文殊で、拾得は普賢だと云つたために、文殊だの普賢だのの事を問はれ、それをどうかかうか答へると、又その文殊が寒山で、普賢が拾得だと云ふのがわからぬと云はれた時である。

「いろくゝの事」の内容は省略されてしまっているため不明だが、「已むことを得ず」と苦し紛れではあるものの、「私」はひとつひとつ答えようだ。文殊と普賢に関するものも、内容は不明だが「どうかかうか」答えたらしい。そして、「その文殊が寒山で、普賢が拾得だと云ふのがわからぬ」という「最も窮した」質問に答えたところで、「縁起」は閉じられている。

ここで「私」が質問から解放されたのかどうかは不明だが、徒然草に做うならば、「私」はここで質問を切り上げたと思われる。いずれにせよ「縁起」は、子供の質問に明解な答えを示せないまま、質疑応答だけが幾つも重ねられたことが書かれているのである。

ところで、どうして子供は「文殊が寒山で、普賢が拾得だと云ふのがわからぬ」のだろうか。それは、「私」がその理由を説明することができないからだ。「私」は困って、「メツシアス」を自称し、「拜みに往く人もある」宮崎虎之助を「現在にある例」に挙げるが、「子供には昔の寒山が文殊であつたのがわからぬと同じく、今の宮崎さんがメツシアスであるのがわからない」。宮崎虎之助は例としては有効だろうが、〈なぜ〉なのかの問いに正しく対応しているとは言いがたい。「パパア」が「文殊」だというのも同様で、単に子供から身近な例としか機能しないはずだ。「私」の回答は、〈なぜ〉AがBなのかという疑問を増やすだけなのだ。子供は、自分で理由を推量したり、質問を飲み込んだりしない。一方、「私」も、文殊が寒山であることを「拒んで答へず」「謔」にしないから、「一つの関を踰えて、また一つの関に出逢」うしかない。完全に関を踰える方法は、理由を説明することだけである。しかし、それは果たせないものである。

だから「縁起」の枠組によるならば、「寒山拾得」本編は「私」から子供への不完全な回答ということになる。しかも、「私」が「大人の読

者は恐らくは一層満足しないだらう。」と危ぶむ程度の。ではどこがどのように「満足しない」のか、次節から確認してみよう。

三

「寒山拾得」では、傍線を使用して、場面が四つに区切られている。本論ではそれに従い、区切られた場面をそれぞれ場面1、場面2、場面3、場面4と呼ぶことにする。また、引用箇所を使用した線のうち、傍線は特定の事実を示している箇所、二重傍線は理由や根拠に関する箇所、破線は物語の時間軸や場所から外れている箇所、波線はその他の重要箇所、二重波線は最重要箇所¹⁾に付した。

それでは、場面1から見よう。場面1は、閩丘胤の紹介から始まっている。

唐の貞観の頃だと云ふから、西洋は七世紀の初日本は年号と云ふものやつと出来掛かつた時である。閩丘胤と云ふ官吏がゐたさうである。尤もそんな人はゐなかつたらしいと云ふ人もある。なぜかと云ふと、閩は台州の主簿になつてゐたと言ひ伝へられてゐるのに、新島の唐書に伝が見えない。主簿と云へば、刺史とか太守とか云ふと同じ官である。支那全国が道に分れ、道が州又は郡に分れ、それが県に分れ、県の下に郷があり郷の下に里がある。州には刺史と云ひ、郡には太守と云ふ。一体日本で県より小さいものに郡の名を附けてゐるのは不都合だと、吉田東伍さんなんぞは不服を唱へてゐる。閩が果して台州の主簿であつたとすると日本の府県知事位の官吏である。さうして見ると、唐書の列伝に出てゐる筈だと云ふのである。しかし閩がゐなくては話が成り立たぬから、兎も角もあたことにして置くのである。

この物語の主人公である閩丘胤の存在が、根拠を以て冒頭で疑われ、

にもかかわらず反証を示さず「兎も角もゐたことにして」物語を進めるという、強引な始まりである。

閻の存在していた理由を説明しない代わりに、閻がいけない可能性については、時代や地理、官位について、関係があるとは言えない吉田東伍の意見まで挿みながら、詳しく書かれている。だが説明を書けば書くほど、閻がいけない可能性への説得力が高まり、「兎も角もゐたことに」する強引さが際立って見える。「もともと小説なのですから、フィクションであることは前提であって、ことさら断る必要はないところ」(田中実「神々の闘い」の時代に、鷗外の『寒山拾得』を読む)『日本文学』平二七・八)なのに、やぶへびになってしまっているのだ。

だが、この箇所は単なる「寓話」(同前)ではない。合理的に理由を説明できなくても、特定の事象が在ると主張している、しなければならぬという意味で、「縁起」に正しく対応しているのである。⁽²⁾

さて、閻は「台州に著任してから三日目」に、国清寺に向かう。

閻は前日に下役のものに言つて置いて、今朝は早く起きて、天台県の国清寺をさして出掛けることにした。これは長安にゐた時から、台州に著いたら早速往かうと極めてゐたのである。／何の用事があるつて国清寺へ往くかと云ふと、それには因縁がある。閻が長安で主簿の任命を受けて、これから任地へ旅立たうとした時、生憎こられぬ程の頭痛が起つた。(略)かう云ふ因縁があるので、閻は天台の国清寺をさして出懸けるのである。

引用したのは、国清寺に向かう「因縁」を説明する箇所である。説明の前と後に、「因縁」があることを書いて、「因縁」の存在を殊更強調している。

では「因縁」の内容を確認してみよう。「単純なレウマチス性」であつたものの「神経質」なせい、「掛かり附の医者薬を飲んででもなか／＼

なほらない」「こらへられぬ程の頭痛」が起つた閻は、訪ねてきた「乞食坊主」に会つてみることにする。理由は、閻の以下のような性質によると、説明されている。

元来閻は科挙に應ずるために、経書を読んで、五言の詩を作ることを習つたばかりで、仏典を読んだこともなく、老子を研究したこともない。しかし僧侶や道士と云ふものに対しては、何故と云ふこともなく尊敬の念を持つてゐる。自分の会得せぬものに対する、盲目の尊敬とでも云はうか。そこで坊主と聞いて逢はうと云つたのである。

坊主に会うことにした理由は、書かれている。しかし、閻が「尊敬の念」を持つ理由には触れず、「盲目の尊敬」という言葉で代えている。「盲目の尊敬」については、場面2で解説が入るので、ここでは理由が書かれなかったことだけ確認して、次に進もう。

間もなく這入つて来たのは、一人の背の高い僧であつた。(略)／僧は黙つて立つてゐるので閻が問うて見た。「わたしに逢ひたいと云はれたさうだが、なんの御用かな。」／僧は云つた。「あなたは台州へお出なさることにおなりなすつたさうでございますね。それに頭痛に悩んでお出なさると申すことでございます。わたくしはそれを直して進ぜようと思つて参りました。」／「いかにも言はれる通で、其頭痛のために出立の日を延ばさうかと思つてゐますが、どうして直してくれられる積か。何か薬方でも御存じか。」

入つてきた僧は、黙つて立つている。話さない理由は書かれていない。閻が用件(なぜ閻に会いたいのか)を問うと、僧は閻の事情を言い当て、頭痛を治すために来たと答える。

閻の台州への異動は、予定されたことだから、僧が知つていてもおかしくはないが、「これから任地へ旅立たうとした」時に起つた頭痛の

ことを知っているのは、妙である。だが、閻は僧が事情を把握している理由を問わず、不思議がりもしない。代わりに治療法を聞き、「呪で直す」という答えを得る。

「はあ呪をなさるのか。」かう云つて少し考へたが「仔細あるまい、一つまじなつて下さい」と云つた。これは医道の事などは平生深く考へてもをらぬので、どう云ふ治療ならさせる、どう云ふ治療ならさせぬと云ふ定見がないから、只自分の悟性に依頼して、其折々に判断するのであつた。勿論さう云ふ人だから、掛かり附の医者と云ふのも善く人選をしたわけではなかつた。素問や靈樞でも読むやうな医者を探して極めてあつたのではなく、近所に住んでゐて呼ぶのに面倒のない医者に懸かつてあつたのだから、ろくな薬は飲ませて貰ふことが出来なかつたのである。今乞食坊主に頼む氣になつたのは、なんとなくえらさうに見える坊主の態度に信を起したのと、水一ぱいである。丁度東京で高等官連中が紅療治や氣合術に依頼するのと同じ事である。

「盲目の尊敬」を以て僧を招き入れた閻は、実は「医道」にも「定見」がなく「自分の悟性に依頼」して「其折々」で判断しているのであつた。ここで服薬しても治らない理由の一つが、「ろくな薬」を処方してもらわなかつたことにあると判明する。「乞食坊主」に頼むことにした「悟性」は、態度が「なんとなくえらさう」という漠然とした印象と、「間違つた処で危険な事もあるまい」という冷静な打算である。東京の高等官の例を挙げて閻の「悟性」を補足する念の入れようで、「悟性」の内訳が説明される。ここに、「僧侶や道士」へ寄せる「盲目の尊敬」は全く考慮に入っていない。また「なんとなくえらさう」という表現に、尊敬が含まれているようにも読めない。「盲目の尊敬」は、「悟性」に優先され

ないし、字義どおりの尊敬の念とも言えないのである。

さておき、閻の「悟性」は結果的に正しかった。閻は僧に「受糧器に一ぱい」の水で頭痛を治してもらい、僧の名前と修行していた寺の名前を教えてもらう。

「天台国清寺の豊干と仰しやる。」閻はしつかりおぼえて置かうと努力するやうに、眉を顰めた。「(略)序だから伺ひたいが、台州には逢ひに往つて為になるやうな、えらい人はをられませんかな。」／＼さやうでございます。国清寺に拾得と申すものがをります。実は普賢でございます。それから寺の西の方に、寒巖と云ふ石窟があつて、そこに寒山と申すものがをります。実は文殊でございます。さやうならお暇をいたします。」かう言つてしまつて、ついと出て行つた。／＼かう云ふ因縁があるので、閻は天台の国清寺をさして出懸けるのである。

閻が「序」に「逢ひに往つて為になるやうな、えらい人」を尋ねると、豊干は途方もなく「えらい人」を挙げる。だが豊干は、なぜ拾得が普賢で寒山が文殊であるのかを言わず、続けて暇乞いを告げて去つてしまふ。文殊と普賢は、仏であつて人でない。やにわに信じられる話ではないが、閻の反応は書かれていないのでわからない。豊干に「盲目の尊敬」を抱いているものの、閻がどの程度発言の内容を信じているのかも不明だ。ただ、これを「因縁」にして、閻は国清寺を目指すのだから、豊干の言葉信じたと言つてよいだろう。

このように、場面1では、主に閻が国清寺を目指すまでの「因縁」が説明されている。その「因縁」の中には、説明される「因縁」と説明されない「因縁」があり、前者の「因縁」には物語の中の時間や場所を越えた補足まで付く場合があるほど丁寧の説明されるのに対して、後者の「因縁」は空白のまままで物語が進んでいく。後者の「因縁」は、冒頭を

除いてほぼ豊干に関する事で、だが彼の不思議さを強調するように書かれているわけではなく、単純に空白にされている。

場面2では、「全体世の中の人の、道とか宗教とか云ふものに対する」「三通りある」態度について書かれる。道に「全く無頓著な人」、「著意して道を求める人」、そしてその「中間人物」である。「中間人物」は、次のように説明されている。

道と云ふもの、存在を客観的に認めてゐて、それに対して全く無頓著だと云ふわけでもなく、さればと云つて自ら進んで道を求めるでもなく、自分をば道に疎遠な人だと諦念め、別に道に親密な人がゐるやうに思つて、それを尊敬する人がある。(略) 中間人物なら、自分のわからぬもの、会得することの出来ぬものを尊敬することに
なる。そこに盲目の尊敬が生ずる。盲目の尊敬では、偶それをさし

向ける対象が正鵠を得てゐても、なんにもならぬのである。

「自分のわからぬもの、会得することの出来ぬもの」への「尊敬」から派生する「盲目の尊敬」は、閻が持っているものであった。だから閻はここで言う「中間人物」ということになるだろうか。だが、閻は「仏典を読んだこともなく、老子を研究したこともない」ので、「道」に対してはどちらかというところ「全く無頓著な人」に近い。先ほど確認したとおり、閻の「盲目の尊敬」は、「悟性」に優先するものではなく、いわゆる尊敬とは異なっていた。豊干と顔を合わせる前の「ふん、坊主か」という眩きから、「道を求める人」全体への尊敬を感じ取ることも難しい。だから「盲目の尊敬」は、単純に盲目的な「尊敬」を捧げることではない。「何故と云ふ」理由もなく「道を求める人」へ向ける、「下役」が閻へ向けるのとあまり差のない「形式的」な「尊敬」のことなのである。では、空白の「因縁」と「盲目の尊敬」は、本編においてどのように機能するのだろうか。次節で場面3・場面4を確認しながら、考察する

ことにする。

四

場面3は、閻が天台の国清寺へ出発するところから始まる。「牧民の職にゐる賢者を礼すると云ふのが、手柄のやうに思はれて」「ひどく好い心持」の閻は、国清寺に到着して、道翹という僧に寺を案内される。そこで閻は、道翹から豊干の騎虎の逸話を聞き、豊干を「はあ。活きた阿羅漢ですな。」と返す。続けて拾得と寒山の話の聞くが、「はあ」「なる程」と、気のない相づちを打ちながら、「心の中では、そんな事をしている寒山、拾得が文殊、普賢なら、虎に騎つた豊干はなんだらうなどと、田舎者が芝居を見て、どの役がどの俳優かと思ひ惑ふ時のやうな気分になつてゐる」。

豊干を「活きた阿羅漢」と評したばかりなのに、閻は「思ひ惑」つている。「はあ」という気のない相づちに続けてのもので、根拠に乏しい評だったことがわかる。豊干との間もそうだが、特に道翹との会話で、閻は「はあ」という相づちを連発する。道翹に質問をして、回答の内容を一切疑わず、「はあ」と丸呑みしては、また質問をすることの繰り返しだ。閻は道翹の話の全て承認して、豊干と寒山・拾得の情報を蓄積している。

一方、道翹は豊干の話と寒山・拾得の話とを区別している。「虎に騎」という「全く不思議な事」をした豊干には敬語を使い、「大切にいたして」いたが、拾得が賓頭盧尊者と向き合つて食事をしたことには「賓頭盧尊者の像がどれだけ尊いものか存ぜずにはいたしたこと、見えます。」と無知を咎める口ぶりである。拾得のお務めが、お供えから食器洗いになつたのはいわば降格人事であり、拾得は寺の周縁に追いやられている。また、寒山は寺の者ですらないようだ。

また、道翹の話によると、豊干は道翹たちが彼を「大切にいたすやうに」
なった或る日、「ふいと出て行つてしま」ったという。だがなぜ出て行っ
たかは、確定できない。大切にされたことと豊干の出奔に因果関係があ
るやうに道翹は述べるが、これは道翹の見解に過ぎない。

場面3で、豊干の逸話を切り口に、寒山と捨得の寺での処遇のされか
たを紹介した後は、場面4で、いよいよ閻と寒山・捨得とが対面する。

この時道翹が奥の方へ向いて、「おい、捨得」と呼び掛けた。/
閻が其視線を辿つて、入口から一番遠い竈の前を見ると、そこに二
人の僧の蹲つて火に当つてゐるのが見えた。／一人は髪の二三寸伸
びた頭を剥き出して、足には草履を穿いてゐる。今一人は木の皮で
編んだ帽を被つて、足には木履を穿いてゐる。どちらも痩せて身す
ばらしい小男で、豊干のやうな大男ではない。／道翹が呼び掛けた
時、頭を剥き出した方は振り向いてにやりと笑つたが、返事はしな
かつた。これが捨得だと見える。帽を被つた方は身動きもしない。
これが寒山なのであらう。／閻はかう見当を附けて二人の傍へ進み
寄つた。そして袖を掻き合せて恭しく礼をして、「朝儀大夫、使持
節、台州の主簿、上柱国、賜緋魚袋、閻丘胤と申すものでございま
す」と名告つた。／二人は同時に閻を一目見た。それから二人で顔
を見合せて腹の底から籠み上げて来るやうな笑声を出したかと思ふ
と、一しよに立ち上つて、厨を駆け出して逃げた。逃げしなに寒山
が「豊干がしゃべつたな」と云つたのが聞こえた。／驚いて跡を見
送つてゐる閻が周囲には、飯や菜や汁を盛つてゐた僧等が、ぞろ／＼
と来てたかつた。道翹は真蒼な顔をして立ち竦んでゐた。
閻が寒山と捨得の許に近づき名乗ると、二人は笑つて逃げてしまふ。
驚く閻が取り残されたところで、物語が閉じられる。この場面で説明さ
れない「因縁」を、一つずつ検討してみよう。

まず、寒山と捨得が、閻の見当どおりなのか、確定することができない。
道翹が捨得の名を呼んだとき、「頭を剥き出した方」は確かに「振り向
いてにやりと笑つた」が、「返事はしなかつた」からだ。閻は、二人に
向かつて挨拶をしたので、閻の見当が合っているか、確認ができない。逃
げしなに寒山が「とあるが、閻が見当を付けた寒山なのか、寒山本人な
のか、書かれていないのでわからない」。

次に、閻に名告られた二人が、笑つて逃げた理由もわからない。否定
も肯定もしなかつたので、彼等が文殊と普賢かどうかともわからない。⁴「逃
げしなに寒山が「豊干がしゃべつたな」と云つたのが」誰に、「聞こえた」
のかもわからない。もちろん、「寒山」が、豊干が何をしゃべつたと思つ
たのかもわからない。僧たちが何のために閻の周りに「たかつた」のか
も、道翹がなぜ「真蒼な顔をして立ち竦ん」だのかもわからない。全て、
書かれていないからだ。物語の最後が、空白の「因縁」だらけなのである。
この空白ばかりの結末で確かなのは、閻が国清寺を訪ねて寒山と捨得
に名告つても、「なんにもなら」なかつたことである。場面2で触れら
れた「盲目の尊敬」の不毛さは、この結果をこそ指していたといえる。「偶
それをさし向ける対象が正鵠を得てゐても」とは仮定の話だから、寒山
と捨得が「正鵠」だったのかは、やはりわからない。閻は、寒山と捨得
が、どちらがどちらかわからないまま挨拶をして、実際に「正鵠を得て
ゐても」いなくても、とにかく二人に逃げられたのだ。

五

ここで、本編における空白の多さの意味を考える。まず、これらの空
白で一番大きな問題は、寒山と捨得がなぜ文殊と普賢なのかということ
だ。本編の中で理由を求めるとすれば、豊干が閻にそう言つたからであ
る。なぜ豊干が言つたのかと言えは、閻に問われたからで、閻が豊干に

問うたのはただの「序」だから、明確な理由がない。豊干の言葉を閻が信じた理由は、わからない。強いて言えば、薬を飲んででも治らなかつた閻の頭痛を豊干が治したのと、豊干が閻が「盲目の尊敬」を寄せる「坊主」だったからだが、閻の頭痛は閻が「実際（略）頭痛がすると気にしてゐて、どうしても癒らせずにゐた」実体的ないものだったし、「盲目の尊敬」には「何故と云ふこと」がない。「はあ。」の相づちで相手の言葉を丸呑みしてしまう閻の性質ゆえということならば、理由を用意する必要がなくなるのだが、いずれにせよ、元を辿ってゆくと、理由を見つけることができなくなる。だが、理由がなくても、物語は進んでゆく。理由がなくとも、事実があるからだ。空白の多さは、それを浮き彫りにしている。そもそも頭痛を起こした閻丘胤は、この物語の人物でありながら、実在を疑われ「閻があなくては話が成り立たぬから、兎も角もあたことに」された人物であつた。彼は理由がなくても「兎も角」と言い切られることとで、存在している。そのような閻の存在によって、この物語は動き出すのだ。

逆に、「縁起」の子供のように「兎も角」が通用しない人間には、この話は「満足しない」ものであり、「因縁」を説明できないが故に、最初から「謔」にされる可能性もはらむ。それでも、本編は説明できない「因縁」は説明しない。「兎も角」と強引に物語を始め、空白はそのまま放置して、事実の積み重ねによって物語を進めてゆく。十分な説明ができなくても、「一つの関を踰えて、また一つの関」へ向かうのだ。

「寒山拾得」は、空白を読んだり、そこから作者の思想を汲み取る物語なのではない。説明できない「因縁」を踏まえた上で、なお「兎も角」と言い切つて進む物語なのである。

注

(1) 鷗外の意識が「窮屈な歴史から自由な人間へ」と解放されたとする唐木順三（『鷗外の精神』唐木順三全集 第二巻）筑摩書房、昭四二・七）、鷗外の許に誰も拝みに来ないことについて「まだ」が「もう」であることを十分すぎるほど知っていたはず」とする篠原義彦（『鷗外の軌跡―高瀬舟』『寒山拾得』と「上院占席」問題―『高知大学学術研究報告』昭五九）、「静謐な「私」の世界」の「自在」な「遊弋」を見る矢部彰（『寒山拾得』考）『文芸と批評』昭六二・九）など、「パバア」が「文殊」だという「私」の発言に、作者である鷗外の意識を読みこむ見解は多いが、本論では「私」による子供への回答以上の意味はないと考える。

(2) ちなみに閻丘胤は、閻姓ではなく閻丘姓である。古田島洋介の成果（『寒山拾得』原拠再考）『国文学』昭五七・七）によって、「寒山拾得」の典拠が東京大学附属図書館所蔵の鷗外文庫にある、白隠注釈『寒山詩闡提記聞』（延享三）にあると判明しており、同書の鷗外本人の手とみられる書き込みで、鷗外が閻丘姓であることを認識していたこともわかっている。古田島は姓の変更について「日本の読者」への「なじみやす」さや閻丘胤の性格などを考えた鷗外の「軽い気持」と指摘しているが、閻姓に変更した場合、ますます閻丘胤の実在が危ぶまれることになるので（仮にどこかの書物に記載があつたとしても、それは閻丘姓の閻丘胤であつて閻姓の彼ではないはずである）、尚更「兎も角もあたことにして置」かねばならない。重要な変更点だと言える。

(3) 『寒山詩闡提記聞』の「三隠詩集序闡提記聞 卷第一」には、寒山の風貌について「状如貧子」。形貌枯悴。（略）乃樺皮為冠。袋裘破弊。木屐履地。」（『白隠和尚全集 第四巻』龍吟社、昭九・九）

とあり、閻の推測は正しいのだが、物語の中では確認できない。また、同資料でも「豊干饒舌^マ。饒舌^マ」(同前)と話したのが二人のどちらかは不明。

(4) 磯貝秀夫(前掲)は「何も書いていない」ことを指摘して「寒山は、世俗的な地位はもちろん、どんな能力も持たない、ただの人はだかの人間それ自体」と述べているが、「はだかの人間それ自体」かどうかやはり書かれていないので、不明である。

(本論の「寒山拾得」および「縁起」の引用は、『鷗外全集第十六卷』(岩波書店、昭四八・二)に拠った。)

(たかのなほ 日本学研究所研究員)